

広がった。本講演では、H5N1ウイルスを含めた高病原性鳥インフルエンザに関する研究の歴史などについてまとめてみたい。

HORIMOTO Taisuke : History of Influenza

(2012年10月27日記念講演要旨)

記念講演2

座長：中山裕之

日本愛犬史

— ヒューマン・アニマル・ボンドの視点から —

日本獣医史学会理事長 小佐々 学

筆者は長年にわたり全国各地の古い犬の墓(犬塚)の調査研究を続けており、その成果は主に日本獣医史学会で報告した。特定の犬の死を悼んで弔うために建てられた古い犬塚のほとんどが義犬(=「忠犬」の旧名)の墓であり、また義犬の墓は愛犬や伴侶犬の墓であった。したがって、義犬の墓の歴史は、わが国における動物愛護や動物福祉の歴史であることも分かってきた。伝説・伝承や古代史料に記載された犬塚をはじめ、江戸時代初期からは史実として手厚く葬られた犬たちがいたにもかかわらず、筆者が調査するまで、それらの存在はほとんど知られていなかった。また、調査対象を古代から幕末維新时期前後までの古い犬塚に限定したのは、欧米の動物愛護思想の影響がほとんど及んでいない時代における、日本人の動物観、人と犬との関係など、日本におけるヒューマン・アニマル・ボンド(HAB:人と動物の絆)の歴史を知ることができると考えたことによる。今回は、犬塚の歴史を中心にして愛犬や伴侶犬の歴史の概要を述べてみたい。

まず、伝説・伝承の犬塚として、聖徳太子の愛犬「雪丸」塚(奈良県)、人身御供伝説の犬塚(兵庫県・長野県・山形県)、大蛇伝説の犬塚(大阪府・愛知県・佐賀県)、弘法大師伝説の犬塚(香川県・徳島県)、播州犬寺の義犬塚(兵庫県)、蓮如の犬塚(滋賀県)、羽犬塚(福岡県)、老犬神社(秋田県)などがある。次に、古代史料記載の犬塚としては、『日本書紀』の捕鳥部萬の白犬墓、『播磨国風土記』の品太(応神)天皇の狩犬麻奈志漏の墓などがある。

さらに、史実の犬塚では、日本最古のものは江戸時代初期の1650年の小佐々市衛門前親の義犬「ハナ丸(華丸)」の墓(長崎県大村市)である。さらに、1787年の加藤小左衛門の義犬「矢間」(長崎県雲仙市)、1835年の暁鐘成の愛犬「皓」(大阪府東大阪市)、1853年の横田三平の義犬「赤」(高知県安芸市)、幕末の1866年の町火

消の「は組」の新吉の唐犬「八」の墓(東京都墨田区)がある。また、明治時代初めの維新期では、1869年の島津随真院の愛犬「福」(宮崎県宮崎市)や1876年の小篠源三の義犬「虎」の墓(熊本県熊本市)がある。

ここで注目されるのは、小佐々前親の愛犬ハナ丸の墓は、世界最初の人の保護も含む動物愛護法である五代将軍徳川綱吉の「生類憐みの令」より35年も前に建てられていることである。また、日本では犬以外にも猫や馬などの動物が人と同様に葬られていたが、西欧のキリスト教国では1822年に英国で動物虐待防止法が成立するまで動物虐待が日常的に行われた過去があり、動物の墓を建てることなどあり得ない時代であった。

日本の愛犬の歴史を顧みることにより、ヒューマン・アニマル・ボンドの視点から日本人の動物に対する感性や動物観を再考すると共に、上野に銅像がある西郷隆盛の愛犬ツン、さらには有名な渋谷の忠犬ハチ公や新潟の忠犬タマ公にも言及してみたい。

KOZASA Manabu : History of Companion Dogs in Japan-From a Viewpoint of Human Animal Bond
(2012年10月27日記念講演要旨)

記念講演3

座長：倉林恵太郎

21世紀にこそ伴侶動物が必要

— 動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育の歴史 —

赤坂動物病院院長 しば ない ひろ こ 柴内 裕子

多くの人々は清潔で優しい動物に出会うと、ごく自然に笑顔になり手を差し延べて温かい言葉をかける。動物達は人に内在する優しさや活力を引き出す名手である。このような人と動物とのふれあい、相互作用から生まれる精神的、身体的、社会的効果について、獣医学、精神科学、脳科学、生理学、心理学、児童発達学、教育学、自然環境学等々の分野で研究が進められている。

その理由は多岐にわたっているが、中でも都市化が進む先進諸国においては伴侶動物が、人の健康と福祉と教育に重要な役割を担いはじめていることに注目しなければならない。人口が集中する大都市部では、集合住宅化、コンクリート化、少子高齢化、核家族化、人間愛の希薄化、物質偏重化等々により、本来の家庭や地域社会は崩壊し、人々は情動の安定を失い、犯罪は凶悪化し、子供か